



西区文化協会は1981(昭和56)年の創立。創作・芸能・茶道部門に分かれて活動しており、誰でも加入できます。「にしぶんか」は創立から5年後に発刊されました。西区に密着した文化と歴史、地域に隠された趣あるエピソードを交えて、温故知新を語り継ぐ広報誌です。地域振興課(区役所4階48番窓口)でお渡ししています。



2024(令和6)年に西区は80周年を迎えます。これを記念して、西区文化協会が発行している広報誌「にしぶんか」から、これまでの西区の歴史をひも解いていきます。ぜひ西区のむかしに思いをはせてみてください。

第10回 よし かわ えい じ 吉川 英治

にしぶんか No.36 から

吉川英治(1892～1962年)は久良岐郡中村根岸(中区)に生まれ、自伝によると9歳の時赤門(東福寺)近くに引っ越しました。その東福寺境内が遊び場だったそうです。父の事業の失敗から、英治は11歳の時に南太田の尋常小学校を中退、その後印刷工場などの職業を転々としたが、船員工として三菱ドックで働いていた18歳の時に、今のみなとみらい地区の帆船日本丸が係留されている第1号ドックに入っていたシアトル航路の信濃丸(約6千トン)の外装塗装工事をしました。その時に足場の落下によりドックの底に落下。重症を負いました。入院一か月を余儀なくされ、退院後新しい職を求めて桜木町から東京へ出発します。そこで川柳に出会いこれが文学に目覚めるきっかけとなりました。作家としての英治は、貧しい生活の中で自分を高める努力と謙虚さを怠りませんでした。英治の没後、文子夫人は誠実で謙虚、ユーモアあふれる英治の生き方を「どうか娘を頼みます。」を出版することで伝えています。

吉川英治の作品は「宮本武蔵」「新書太閤記」「私本太平記」「三国志」など多数。

横浜を舞台とした小説「カンカン虫は唄う」を40歳で書いています。



絵 鈴木太郎